

私の嫌いな王女の話

karinomaki

ガラスの仮面

私が最も素晴らしいと思う漫画の一つが、「ガラスの仮面」です。主人公の北島マヤは女優で、漫画の中で様々な人物を演じ、その人物にあまりにもマヤがぴったりの演技をするので、お芝居の中にしか存在しない人物とは思えないほど、その人物たちは生き生きしています。

王女アルディス

マヤが渾身の演技をするお芝居の中の人物で、アルディスという王女がいます。

この王女は、とても幸せな王女です。例え姉に三年間牢獄にとらわれても、一時は悲しみますが、幸せを奪われることはなく、笑顔で乗り越えます。

この王女は、きっと誰からも愛されることと思います。

しかし、私は、ガラスの仮面の中で、このひとだけは好きになれません。その理由を書きたいと思います。

不幸の意味、底から突き上げる

それは、アルディスが、不幸というものから、宝を、底力を、そして、ドロドロから伸びる強さを一つも得ないで、ユリジェスという貴族と共に王室を逃亡して幸せになることで物語が終わってしまうからなのです。

もし私がアルディスならば、牢獄の中で、自分自身ととことん向き合ったでしょう。どうしてこんな目にあうのか、そしてつかんだでしょう。そうだ、どんな不幸の中でも輝き続けるものがある、それは、自分の生き方だと。人生について考えることだと。

ひとは、苦しい目にあうと、自然に哲学者になるものだと私は思っています。自分を哲学者と思っていなくても、何も書いていなくても、不幸と向き合ったひとは立派な哲学者です。

アルディスが三年間何をしていたかという、ユリジェスのことを思いだしたり、牢番や番兵たちの冗談や世間話を聞いて心をなぐさめていただけなのです。

アルディスは結局楽な方に流れ、哲学者になどなれはしなかったのです。

アルディスの姉

アルディスには、オリゲルドという、悲劇の代名詞のような姉がいます。この姉は、幼い頃から八年間牢獄で過ごし、氷のような心になってしまいます。

この姉は、最後は悪にまみれて女王として生きていく道を選ぶのですが、アルディスが牢から男と逃げたことは、この姉を見殺しにしたのと同じだと私は思っています。

悪にまみれてしか生きられない人、自分の姉を見捨てて自分だけ新天地で幸せになるアルディスは、本当に心が浅い人です。何が「幸せの王女」かと、私は言いたくなります。

自分にできること

アルディアスの姉は、牢の中のアルディアスを、最後は殺そうとしました。アルディアスが逃げたのは、ある意味仕方のないことかもしれません。しかし、アルディアスは、残してきた姉の不幸を思い返すこともせず、ラストはユリジェスの腕の中でこれ以上ないほど幸せに微笑むのです。

アルディアス女性です、男性に幸せにしてもらおう存在かもしれません。しかし、私は決してアルディアスのような生き方はしたくありません。私は、個人的には、人の不幸をかえりみずに、自分たちの家庭の幸せだけを見つめて生きる生き方は恥ずかしいことだと思っています。だから私は独身を選んだのかもしれません。しかし、家庭を持たれていても、世の中や人の不幸を見過ごしにできず、働いている方はたくさんおられます。アルディアスのような女性は、夫の子供を産んで、家を守ることにしか幸せを感じないでしょう。例え遠くで姉がどんなに血にまみれた生き方をしているとしても、もう思い出すこともないでしょう。アルディアスにたった一つできることがあるとすれば、・・・と考えても見るのですが、アルディアスには幸せになること以外、何もできません。

ガラスの仮面は漫画の最高峰だと思います。作者もこれをわかりながらアルディアスを描いたはず
です。

参考文献

美内すずえ作

「ガラスの仮面」